

フィールドにおける二つの語り

Two Narratives from Fieldwork

中筋由紀子

序：インタビューにおける二つの「語り」—先祖祭祀の調査の過程で

- ① フィールドの変容と「語りの場」の構造の変化
- ② 「語り」の多層性
- ③ 「語り」の古層の分析
- ④ 群の輿論
- ⑤ 「語り」の個人化の指標

【論文要旨】

本論考は、先祖祭祀をめぐるインタビュー調査において、筆者が出会った二つの異なる場における「語り」のあり方を分析することによって、調査対象となるフィールドにおける、「語り」の構造とその変容について考察するものである。

筆者が出会った二つの語りの場とは、一つは、愛知県の中山間地農村におけるもの、もう一つは、東京都世田谷区におけるものである。二つの語りの場の違いは、家の先祖祭祀という同じ話題を、ムラで共有された記憶の一環として位置づけるか、個人的・私密的な問題ととらえるか、という点にあると考えられた。

筆者は、このような調査対象の語り方の違いに対応した調査技法について考察するに当たって、社会学者福武直が、農地改革後の農村で行った調査に着目した。それは、インタビューによる村落構造の調査と、標準化された質問紙による態度調査、という二つの方法の併用による調査である。福武の構造分析は、ムラの一員となることで最もよく知ることができるような、共有された知識としての村落の構造の調査、すなわち前者に立脚する。一方、それから一応は独立したものとしての、個人の利害や意見を尋ねる後者の態度調査は、農村民主化の未来を示唆するものとして位置づけられていた。

福武の調査は、村落内に異なる二つの語り方が共存することに対応した、二つの調査法を併用したものであるが、筆者は、こうした語りの多層性に着目した研究として、さらに民俗学者宮本常一の『忘れられた日本人』に着目した。そこには、寄り合いを最も古い共同体の語りとして捉え、そこから語り次第に疎外され個人化されてゆく姿が描かれている。筆者は、この変化を、二つの尺度によって捉え直すことを試みた。それは、個人の語りを個人自身の利害や意見として析出させない二つの規制の残存という尺度である。二つの規制とは、一つは共有された過去にもとづく規制、もう一つは、若者組などの横のつながりによる規制である。筆者はさらにこれを、前者は、R.ベネディクト『菊と刀』の「過去に負い目を負うもの」という概念を、後者は柳田国男『婚姻の話』の「群の輿論」という概念を用いて検討した。

現実のフィールドは、こうした二つの尺度によって多様に位置づけられる語り混在する状況であり、語られる価値や規範が集团的／個人的、という違いと独立して、それを語る語り方の位相についての注意が必要と思われる。

序：インタビューにおける二つの「語り」—先祖祭祀の調査の過程で

論者はこれまでいくつかの地域で、調査対象者各々の家の先祖祭祀について、インタビュー調査を行ってきた。本稿はその過程での論者の体験を契機にした、インタビューという場をめぐる考察である。

論者が体験したのは、家の先祖祭祀という事項について語られる場のあり方が多様であるということであった。論者はどのような語り方でその事項が語られるか、ということが、その事項の変容を分析する上で重要な視点となると気づいたのである。まず論者のフィールドでの体験について詳しく述べてゆく。

論者が語られる場の多様性に気づいたのは、愛知県の中山間地農村のKという字を訪れたときのことである。論者は、以前東京都N区で家や同族の先祖祭祀についてインタビュー調査を行ったことがあり、それを農村と比較しようと考えての調査であった。インタビュー調査自体は、これまで筆者が主に東京都で行った調査と、おおむね同様な手続きを踏んで行った。知人の紹介をもらって電話でお願いし、アポイントをとり、手紙で日付を確認し、当日訪れるという形である。既に当地では、ムラの寺院の住職と前住職にその土地の葬儀等の慣行について話を聞いており、次にその村で最高齢である80代の女性に、その家や同族の先祖祭祀について話を聞く予定であった。ところが、相手宅を訪れると、同年輩の女性二人が既に訪れていて、インタビュー対象者は、次のような言葉を述べたのである。

「根っからほげがきとるもんで、おばあちゃんだけじゃ間違っただこと言わんか心配だて嫁が言うもんで。」⁽¹⁾

二人の女性は同じ村の幼なじみであるとのこと、ただし親族や同族の関係にはない人びとであった。筆者は最初、親しい友人とはいえ、その人たちの前で、葬儀や先祖祭祀などの話題について語ってもらってよいのか躊躇した。その躊躇は、その話題が家の私的な部分に属することであり、そうしたプライバシーに触れることについて、他人がいる場所で自由に語ってもらうのは困難なのではないかという考えによるものであった。それは過去の調査の体験に基づく考えでもあった。

その体験とは、論者が世田谷区のある家で行った、70代の男性に対するインタビューにおけるものである。その調査は、N区の寺院の檀家を対象とした調査の一環として行われたもので、先祖の祀り方やそれをめぐる意識が、各々の家の、過去の社会的・地理的な移動の体験に影響されるのではないかと考え、系譜を遡って過去の世代のそうした体験について尋ねるつもりで、その旨をインタビュー対象者に説明した上で行ったものであった。そのインタビューの途中で、同じ敷地の別棟の一戸建てに、結婚して住んでいる男性の長女が、お茶を出してくれにきたのだが、男性の書いてくれた家系図などを見咎めて、「お父さん、こんな個人的なものを、他人様にお渡しするのはどうかしら」と、言ったのである。女性は、それに続けて、マンション形式で長男や次男の家族と階を違えて住んでいる父親の家には、仏壇の置き場がないこと、先祖や家の来歴などについて、自分たち

は重視していないことなどを語った。その時は、その人にも調査の目的や資料の扱い方を色々説明した上で、了承を得て、その家系図をもらって帰った。

実はこうした家族の間での意見の相違は、その男性には予期されていたことではないかとも思われた。というのは、その男性は、インタビューを申し込んだとき、場所を駅前の喫茶店でと言ったのである。それを、筆者が、よかったらご自宅でお願ひし、変更してもらったのであった。仏壇などにおける先祖の祀られ方を見られたらと思ったのである。もちろん、個別の家の事情や、あるいはその時のインタビューの状況によるものであったのかもしれないが、筆者はその時、そうした事柄が、とりわけ個人的なものである側面を帯びており、それについての配慮が必要であると気づかされたと考えたのである。

即ち、家の先祖のまつりやそれについての考えなどは、家族にとっての私密的なことであるというばかりでなく、同じ家の成員においても、必ずしも共有された知識や考え方ではなく、またお互いの前で自由に述べることの出来る事柄でもない場合がある、ということである。東京都で行った調査においては、インタビュー対象者以外の人々が、ずっと一緒にいて、インタビュー内容について一緒に話をする、ということにはなかった。また、自分としてはこう思っているのだが、息子達はそうはしないでしょ、というような言葉で、家族のとりわけ世代間での意識の違いや、自分の意見は自分だけのものである、というような言葉が、しばしば聞かれたのである。

論者にとっては、K字での調査において、複数の人々がその人の家の葬儀や先祖祭祀について、「おまえは知らんかやあ。わしが憶えとるが。」「わしは憶えがないが。ユキちゃんは何とて言うで。」等の言葉をかわして、互いの記憶を確かめあい、あるいは訂正しながら語られるということ、初めて体験したのであった。それは、同じ字の他の家における調査でも体験されたことであった。もちろん村落においては、同じ字の家の葬儀は、その主要な担い手となる同じ組内の家々にとってばかりでなく、ほとんどの家が何らかのかたちで関与する共同作業であるから、それは当然のことともいえるが、しかしながら同族でない家にとっては関与することのない同族祭祀についても、そうした知識の共有が前提となって、語りの場が構成されたのである。

①……………フィールドの変容と「語りの場」の構造の変化

以上のような二つの異質な「語りの場」の体験は、体験としては現在の常識にとらわれた結果としての、逆転した体験であったと考えられる。たとえば戦後日本の農村社会学において基本となっていたのは、複数の対象者から、共有されている村についての知識を聞き取るという形の「語りの場」であった。戦後の農村社会学の権威とされる福武直は、昭和29年という戦後もっとも早い時期に出版された、社会調査の教科書である『社会調査の方法』という編著の中で、社会調査の方法について、次のように分類している。福武によれば、社会調査は「統計的調査」と「個別調査すなわち事例研究」とに類型として大別でき、その調査類型に対応して、調査の技術も違ってくる。前者に対応するのが調査票や質問紙、あるいは測定などの技法であり、後者が観察や面接という技法になる。そして、論者が体験したような複数の対象者に対する聞き取りは、後者の事例研究の方法の一つとされる参与観察についての記述の中で、集団面接という言葉で表現されている。

「たとえば、集団の成員となり、あるいは集団活動に本来の成員と同じように参与しつつ、その集団を観察するものであり、ある点では集団面接の一形式となる。(中略)そして、このようなやり方は、たとえば長年月にわたってムラの人々と一緒に生活し、完全に村の一員のごとく待遇されるようになるとき、最も理想的となるのである」〔福武編、1954：p17〕

ここで福武が触れているのは、グループ・インタビューのように、互いに匿名化された個人の集まる集団ではなく、村落という長期に持続する社会集団に統合された、複数の人間に対する面接調査のことである。すなわち、農村においては、集団に参加する形で調査を行うものと説明されており、論者の体験した語りの場は、村落においては通常の場合のあり方であるとされているのである。そして同じ書の中で、都市における調査は次のような点において農村と異なっているから、調査方法としては異なった仕方が必要であるとして、中野卓によって次のように説明されている。

「都市では村落に比し、個人単位的・非制度的な交際関係が重要さを増している。従って調査に当たっても、同世帯員でも個人別に、それらを面接調査する必要がある。そして、世帯主に問えば一応そのすべてがわかるということは期待できない。いわんや村のように、同じ村のことなら他の家のこともほぼ、ものしりの人にきけばわかってしまうなどということは全くありえない」〔福武編、1954：p110〕

「ものしりの人」に聞くということは、「構造分析」と呼ばれる農村調査の段階において行われてきたことである。例えばやはり同書で、農村調査について述べた塚本哲人は、諸種の現地についての情報を集積した上で行う、現地調査の本格的な取り組みの最初に、「事情にくわしい本家の古老」〔福武編、1954：p52〕の面接をおく。「村社会の構造分析に関する」知識は、「地主」をはじめとする「そうしたことにくわしい村民」からの聞き取りによって得られるのである。

このような、農村と都市という、対象となる社会集団の性質の相違による、適切な調査技法の違いは、また、フィールドワークを主要な技法とする文化人類学においては、フィールドの全般的な都市化の傾向の進展の中で問題化されてきた。例えば、全社会的な都市化の進展によって、文化人類学においては、「個人中心的民族誌」といわれる、新しい調査のあり方が試みられるようになったとされる。その新しい研究手法について記述した、L.L.ラングネスとG.フランクの『ライフヒストリー入門』を訳した、米山俊直、小林多寿子らのあとがきによれば、この新しい傾向は次のような変化として捉えることが出来るとされる。

「文化人類学において、今世紀前半に確立したフィールドワークの方法は、長期参与観察と聞き取りを中心にしていたが、その対象がもっぱらいわゆる『部族社会』のような民族集団、あるいは村落社会のような地域集団を対象として、個人はその一成員とみなされてきた。インフォーマントは、その個性を消して、集団の代表として記述された。それは集団成員をあたかもクローンのように見なすことであった。

それに対して、個人に焦点をさだめて、個人の生涯を通してその人を取り巻く社会を見るという

方法、すなわちライフヒストリー研究が注目されるようになった。それは社会の近代化、都市化、価値観の多様化など、ある地域社会、ある民族集団を数人の代表者の聞き取りによって捉えることができなくなったことと関係がある」[L.L.Langness & G.Frank, 1981=1993 : p219]

個人を焦点として、その主観を通して社会を捉えるようなインタビュー調査のあり方は、以上のようなフィールドの変容についての認識に基づく工夫であったと考えられる。ところでそうした「語りの場」の変化は、既に農村内部の語りの多層性の中に成立していた個人の語りの展開、全般化として生じたのではないだろうか。そこで次に、農村内部の語りの多層性についてまず考察してみたい。その上でさらに、米山、小林が「クローンのように」と述べている村落のあり方について、当初の問題であった「語りの場」に即して考察してゆきたいと思う。そこでは、個人の意思や利害を析出させないようなメカニズムを、語りの場において見いだすことができるだろう。

②……………「語り」の多層性

例えば先に取りあげた福武直の調査の教科書で、塚本哲人は農村における調査においても、ただ村の物知りに尋ねるだけでは、知ることの出来ないことがあると述べている。一つは、村内の「派閥的なまとまり」についてである。これは「決して愉快的なことでもない」ので、「ひとりのいいぶんにしたがうことをせず」、「被支配層に属する下層の家々」までもいちいち訪ねて、慎重に話す必要があるという。

もう一つは、質問紙や調査票をもって「村民ひとりひとり、あるいは家々をひとつひとつ」回って行く調査のひとつである「態度調査」である。「しかし態度調査の場合、とくに農民においては、本家や地主などの周囲に気兼ねして、本当の気持ちをなかなかいわないことが多い」[福武編, 1954 : p62] い、と塚本は述べる。インタビュー対象者が「態度や行動に関する自己の表現も明瞭を欠くことが多い」時でも、「直接的な観察」を大切に、「他人にもらすべからざることはもらさないという細心の心づかいと、これが研究上必要な作業であるという確信を私たち自身の面接態度のうちに示して、信頼を得るようにする」ことで、そうしたことについて知りうるのであると、塚本は述べている。

塚本が述べているのは、農村において人々が言葉にすることには、多様な位相があるということである。例えば、村の誰もがその知識を認め、村の外部の人にもこの人に聞くといいとすることができるような、物知りの人が語る、村人にも体験的に共有されている知識の位相がある。これは、塚本によれば、「構造分析」という農村社会学の分析法において対象とされる、村の「構造」に当たるものである。一方で、「態度調査」等、個々人の意識や態度を質問紙などによって尋ねるとい、一対一の対面状況で、細心の心遣いと信頼を得て初めて語られるような、それも曖昧な言葉で語られるような、個人的な位相がある。ではこれらの調査の中に現れてくる農民の語りの位相の違いは、生活の中にどのように現象し、位置づけられているのだろうか。ここで、私たちは、民俗学者宮本常一の、『忘れられた日本人』を取り上げてみたいと思う。

この作品は、歴史学者網野善彦が、解説で、「庶民自身の語りを再現した名品、『民話』を生みだ

し伝承する共同体のあり方を伝える文章」と賞する作品である。面接調査という語りの場に注目してこの著を見ると、私たちは、この著が、調査者と村人との出会いにおける村の人々の語り、というものの位相の違いに基づいて、注意深く章立てされていることに気づく。即ち、章の配列を見てゆくと、私たちは、宮本という調査者が、村へ入ってゆくときの、村の人々との出会い方を知るばかりでなく、村における語りというものの多様な位相が、村の古層を表す語りから、村の最も現代的な語りまで、語りの構造の変化の過程を追って、時系列的に配されていることに気づくのである。以下、各章を順に見てゆこう。

この著は、「対馬にて」という、村の古文書を借りようとした時に体験した村の寄り合いの話から始まる。それは、「名倉談義」と題した4人の古老たちからの話に続き、「子供をさがす」というエピソードを挿んで、「女の世間」という、田植えなどの農作業の折に女性の間で交わされる話になる。

ここまでの章立ては、宮本があとがきの中で自ら述べている、村に入っていく仕方、調査の段取りにはほぼ等しい並び方である。即ち宮本は、役場等で資料や古文書を探し、幾軒かの農家の個別調査を行い、また村の古老に会って自由に話してもらう。そしてその間に「主婦達や若い者の仲間⁽²⁾に会う機会をつくって、この方は多人数の座談会の形式ではなしもきき、こちら⁽²⁾もはなす」という手順を踏むのであると述べていて、ここまでは、そうした流れを追っているようにも見える。そしてまたこのような宮本の方法論は、福武直の構造分析の、農村の「構造」に沿って聞き取り調査を進めていくという方法論とも重なるように見える。

ところが次に宮本は、村にとって周縁的ともいえるような「語り」へと目を向ける。例えば、盲目の元「ばくろう」の話を書く「土佐源氏」、土佐山中の細い道をめぐる「土佐寺川夜話」である。そのつぎに自分の祖父等「世間師」と言われる人たちの、個人の語った話になる。そして最後に、「文字を知らないか、知っていても文字に頼ることの少ない人たち」ではなくて、「文字を読み文字に親しむもの」の話を書き取った、「文字をもつ伝承者」という章で締めくくられる。

この「土佐源氏」以下の章は、村の中にいながら、村人達の語りの中にとけ込むことの出来ない、あるいはむしろ積極的に村の外へ出ていった人々の、「語り」の個別性を扱っているのではないかとと思われる。例えば、「土佐源氏」の語り手は、「わしのように村へはいらんもの」は「村のつき合い」はしなくてもよいが、そのかわり「世間もまともなものには見てくれん」と述べる〔宮本、1960=1984：p144〕。また次の「土佐寺川夜話」は、山中の細い道にたよって行われる、村と外との交流の話であり、業病に侵された人だけの山道等の話が語られる。その次には、旅をして世の中を知り、そうした「世の動き」を村人達に知らせ、また村と外部との交渉を仲立ちする等の役割を果たしたりした「世間師」等の人々の話になる。彼らが、文字を知らないために苦勞をしたり、財を失ったりした話がなされた後に、文字を知る人々の話がおかれているのである。

宮本によれば、文字を知る人々の話は、文字を知らない人々と違って、村の伝承を文字の知識に基づいて訂正して話すことがあるが、ただしその人の話は「村全般のものとなることは少なく」「一般の村人はただその人をえらい人としてのみ記憶している」〔宮本、1960=1984：p261〕のであるという。即ち、文字の知識は、それを持つ人々にとって、村の外部への敏感さを与えると同時に、村の共同性からの一種の疎外を生み出すものであると、宮本は考えているのである。従って、『忘れられた日本人』のこうした章の構成は、ただ村の語りの多様な層について述べているというばかりでは

ない。上記のような章の順序は、村の中心的な「語り」から周縁的な「語り」へ、そして村の外部との交流のなかにある「語り」へと、視野の拡大であると同時に、そうした「語り」の展開に伴い、村に変化がもたらされる過程を、「語り」の構造の変容において捉え、表していると考えられる。

③……………「語り」の古層の分析

さて私たちは以上で、福武直の社会調査の教科書や宮本常一の『忘れられた日本人』という書物の構造を見てゆく中で、村における多様な「語り」の位相について、またその重なりや変容の過程について見る事ができたと思われる。次に私たちはこうした変化を「語り」の個人化の過程として捉え、調査において「語り」を分析するツールとして用いることができるようにしたい。すなわち、村の古層をなす集団の「語り」を一方の極にして、個人の主観を通してすべての社会現象が語られるような社会をもう一方の極として、その間をつなぐ変化の過程を、尺度化できるような指標を考察したい。そのために、まず以下では宮本が「語り」の古層とし、また福武が調査の基本において、集団的な「語り」の場について詳しく見てみたい。

宮本常一は、先の書の「対馬にて」という冒頭の章において、古文書を借りようとして、「そう言う問題は村の寄り合いにかけて皆の意見をきかなければいけない」と言われた時の体験を述べている。結果を待ちかねて出かけていった宮本の目には、寄り合いの場は、人々が一見ばらばらに雑談をしているように見えた。しかし宮本は、やがてその場に固有な秩序と手順があることに気づく。寄り合いの場は、「村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でもはなしあう」という古い「協議の形式」であるとされ、70代の老人が語る次のような古い寄り合いの形が述べられる。

「昔は腹がへったら家へたべにかえるというのでなく、家から誰かが弁当をもってきたものさうで、それをたべて話をつづけ、夜になって話がきれないとその場へ寝る者もあり、おきて話を明かす者もあり、結論が出るまでそれが続いたそうである。といっても三日でたいいのむずかしい話もかたがついたという。気の長い話だがとにかく無理はしなかった。みんなが納得のいくまではなしあった。だから結論が出ると、それはキチンと守らねばならなかった。話といっても理窟を言うのではない。一つの事柄について自分の知っている限りの関係ある事例をあげていくのである。」
[宮本, 1960=1984 : p16]

宮本は、こうした村の寄り合いについて、「すべての人が体験や見聞を語り、発言する機会をもつということは、確かに村里生活を秩序あらしめ結束をかたくするために役立ったが、同時に村の前進にはいくつかの障害を与えていた」[宮本, 1960=1984 : p21]と述べる。

ところで村の寄り合いは、私たちの考える会議などと同じようなものであったろうか。例えば、村における地位の高低や資産の大きさ、年齢などの属性が、話し合いの対等さに影響を与えたことは、予測のつくことではあるが、宮本が指摘する寄り合いの特徴は、そういうところにあるのでは

ない。例えば宮本は、彼の知人が、農地解放（改革）の話し合いがまとまらないのに困った時、年寄りの示唆を受けて寄り合いで次のように述べた折のことを描いている。

『みなさん、とにかく誰もいないところで、たった一人暗夜に胸に手をおいて、私は少しも悪いことはしてらん。私の親も正しかった。祖父も正しかった。私の家の土地はすこしの不正もなしに手に入れたものだ、とはっきりいきれぬ人がありましたら申し出て下さい』といった。するといままで強く自己主張していた人がみんな口をつぐんでしまった」〔宮本，1960=1984：p38〕

また宮本は、自分が子供の時、村の寄り合いで、大声で主張を続けていた男に、一人の老人が「足もとを見て物をいいなされ」と言い、その一言に男が黙ってしまったのを見たという体験を述べている。また宮本は、「女の世間」という別の章で、女性は「共同体の一員である前に、女としての世間」をもっていること、そこで交わされる話を通して、「男への批判力を獲得した」ことを指摘している。

即ち、寄り合いにおける語りには、独特な構造があったと考えられる。一つには、寄り合いにおける言葉は、「理窟を言うのではない」と宮本が言うように、個人の意見や考えではなく、自分が体験した、あるいは誰かから聞いた、かつ基本的には自らの村の、過去の事例をあげてゆく形で述べられるものである。そしてもう一つには、個々人は、一人の独自の内面をもった人間としてというよりは、各々の家という過去からの連続性の中に位置づけられた者として、寄り合いの場に参加している。文化人類学者R.ベネディクトの言葉を借りて言い換えるならば、「過去に負⁽³⁾い目を負う者」としての自らの立場を忘却したような言葉を述べることは、人々の非難を受けるということである。しかもこの過去については、自らの家の過去であるとはいえ、その家の成員こそが最もよく知っているという風には、村においては位置づけられていない。例えば宮本は、先の「暗夜胸に手をおいて」の事例に関連して、「年より仲間」というものについて、次のように述べている。

「その村では六十歳になると年より仲間に入る。年より仲間はあつまり、その席で、村にあるいろいろのかくされている問題が話し合われる。かくされている問題によいものはない。それぞれの家の恥になるようなことばかりである。そういうことのみが話される。しかしそれは年より仲間以外にはしゃべらない。年よりがそういう話をしあっていることさえ誰も知らぬ。」〔宮本，1960=1984：p37〕

また宮本は、村の女性の婚姻生活などにおける困難等の、密かな相談相手になってきた「世話焼きばっば」の話にふれている。こうした年より仲間や世話焼きばっばの存在は、村の各々の家の成員の事情や過去について、同じ家の他の成員や、あるいは当の成員以上によく知るものが村の中にいること、そして、彼らが何を知っているかは明らかでなくとも、そうした知識のあることが、村人達の言葉を抑制するものとなっていたことを示しているものと思われる。村のなかの「語り」には、一つにはこうした縦の過去、あるいは記憶というものの共同性による、村人達の言葉の規制、あるいは規範化が働いていたと考えられる。

④……………群の輿論

私たちは次に、記憶の共同性に基づく「語り」の規範化と別に、「語り」が村落内の集団の相互関係に位置づけられることで規制されている様子を、柳田國男の『婚姻の話』（1947年）から見てゆきたい。柳田はそこで「群の輿論」ということばを用いて、「語り」を集団に帰属させるメカニズムについて述べている。

柳田が「群の輿論」という言葉を用いるのは、若者組、娘組等の活動が、村の中で配偶者を選ぶ自由を確保してきたという、かつての婚姻の成立における若者達の役割を述べる中でである。柳田は、かつての日本の村が内婚集団であったこと、そうした婚姻のあり方が、同齡団体の活動によって支持されてきたものであると考える。同例団体の活動、特に彼らの「群の輿論」こそが、個々の家々の当主が、経済力や家格を高めようとして村外との婚姻を求める力と拮抗してきたというのである。柳田によれば、村外との婚姻が一般化してくるのは、こうした同齡団体の解体によって、個々の家々の欲望が解放されたからである。柳田は個々の家と拮抗する力を持っていたとする「群の輿論」について次のように述べている。

「男女各々身に適した選択を誤らず、いったん契りを籠めた以上は一生涯背かぬということは、今でも全部の国民に共通した念願であるに関わらず、これを個々の判断に委ね、我欲の自由に任せておくと、失敗するものは多かったのである。これに対して正しい指導力と標準を示すものは、土地を同じゅうしてともに育ち、互いに知り悉している青年処女、自身もまたこの問題に無限の関心を寄せているものの群の輿論の他にはなかったのである」[柳田, 1947=1990 : p159]

即ち、柳田によれば、このような同齡団体の集団としての意見が、安易な男女の結合を抑制すると共に、一旦成立した結合を、男女の家や世間に認知させる力ともなり、かつまた、その契約を将来にわたって監督するものになっていたというのである。また柳田は、婚姻の問題に限らず、村では「群の輿論」という形で人びとの発言が認知され、効果を持つことを指摘する。例えば柳田の、「群の力でないと表示し得られない女性の輿論」[柳田, 1947=1990 : p74]ということばは、一人では立場の弱い女性でも、「群の輿論」としてその利害を、家長や村のあり方などにも反映させたりすることができたということである。

つまり、個々人の意見は、誰かの意見ではなく「群の輿論」となることで、初めて村の中で認知されるものとなる。それは、たまたま自分の意見が単に多数派の意見と同じである、ということではなく、自らの村の中での位置に応じた団体生活において認知されていること、その中でふさわしく活動することを通じて、形成されてくる考えであるということである。換言すれば、自分の意見や考えが先あって、それに仲間を同調させるとか周囲の同意を得るというのではなく、ある人の考えが、団体生活の中から形成されてきたものであり、みんなの意向を汲んだものであると認知されることが、群の輿論であるということである。

従って群の輿論は「語り」の場においては、誰か一人の意見を聞く形では得ることのできないも

のである。それは、日常の団体生活を基礎として、そこで交わされるやりとりを背景としているとはいえ、既にそこで完全な意見の一致を見ていて、団体のどのメンバーでも外部の人間に、これが我々の意見だと説明できるというものではなく、ある場面で、ある問題をめぐって、集団の相互作用の中で、生じてくるものなのである。従って、群の輿論を聞きたいのであれば、それは集団の中で語られなくてはならない。

私たちは柳田の議論から、村の中の「語り」の多層的な成立は、村内に利害の相克する諸種の集団のあることと対応しているという議論を展開できるが、ここではそれには立ち入らない。私たちは柳田の群の輿論という指摘が、「語り」を村落内の集団に帰属させることで認知するというあり方によって、「語り」を規制する仕組みを指摘したものであることに議論をとどめたい。私たちはこれを、先の「縦の規範力」に対して、「横の規範力」として捉えておこう。

⑤……………「語り」の個人化の指標

以上で私たちは、「語り」を個人の意見や利害そのものとして析出させない、二つの規範力があることを見いだした。それは村落という、個人を越えて長期に持続し、生活上の多くがその内部の社会関係に収束して営まれる、統合された社会集団があり、そのなかに個人が位置づけられていることによる。従って、以上の分析から、私たちは次のような変化によって、上述のような二つの規範力が失効すると推測することができる。

まず第一は、過去の記憶の共有という前提が崩れて、それが個々人のプライバシーと捉えられるようになってゆくその度合いによって、「縦の規範力」が無効化してゆくということである。第二は、仕事や消費などを契機とする日常生活上の色々な社会関係が、次第に村落や家という単位を媒介とせずに直接個人が取り結ぶ形となり、かつまた村外へと拡大されたものとなってゆく度合いによって、「横の規範力」が無効化してゆくということである。「語り」の個人化は、このような二つの指標によって「語り」の場を分析することで、その程度を知ることができるだろう。

そしてまた、論者の冒頭で取りあげた先祖祭祀の調査においては、こうした「語り」の構造の変化に着目することは重要である。例えば、東京都N区の調査で「地付」とされるような代々その土地に定着してきた家の人びとと、愛知県の中山間地農村における家の人びとは、伝統的な儀礼の残存の度合いにおいても、また家や先祖祭祀をめぐる意識においても、一見それほどの違いが見いだされない点が多い。しかしながらそれを語る語り方において、都市は完全に個人化しているのである。そのような違いは、近代日本の社会移動の特徴、すなわち、柳田国男が「先祖になる」ということばで表現したような、集団主義的な価値を個人的に達成しようとしたあり方に由来するのではないかと推測されるが、ここではそれについては指摘するにとどめたい。本稿が見いだした点は、「語り」の多層性と、それを「縦の規範力」と「横の規範力」、という二つの尺度によって分析的に位置づけることができること、そして都市化に伴う社会現象の変容を聞き取り調査するにあたっては、語られる内容とは別に、「語り」自体が個人化すること、その程度に着目することが重要であることである。

註

(1)——愛知県西加茂郡藤岡町大字Kにおいて筆者が行ったインタビュー調査。調査の概要については、中筋由紀子、「日本文化における伝統的なもの」、『愛知教育大学研究報告第49輯（人文・社会科学）』、2000年、p51-59.

(2)——東京都中野区の真言宗寺院Sの檀家に対して、筆者が行ったアンケートとインタビューによる調査。詳細は、松本由紀子、「大都市における先祖祭祀と『家移動』」、『宗教と社会』3号、1997年、p140-161.

(3)——例えばベネディクトは、『菊と刀』の中で次のように述べている。

「彼らは過去に負い目を負う者である。西欧人が祖先崇拜と名付けているものの大部分は実は崇拜ではなく、また祖先にだけ向けられているのでもない。それは人間が過去一切の事物に対して負っている大きな債務を認める儀式である。」[R.Benedict, 1946=1951 : p113]

ベネディクトは、同書で日米の「文化の型」を比較しているが、第五章「過去と世間に負い目を負う者」では、過去や世間に対する負債を意思決定や行為の動機とする日本と、それらからの独立を基礎とするアメリカという文化の違いについて述べている。

引用文献

R.F.Benedict 1946, *The Chrysanthemum and the Sword : patterns of Japanese culture.* = 1951 『菊と刀—日本文化の型』長谷川松治訳、社会思想社.

福武直編、『社会調査の方法』、1954年、有斐閣.

L.L.Langness & G.Frank, 1981, *Lives : an anthropological approach to biography.* 米山俊直、小林多寿子訳、『ライフヒストリー研究入門』、1993年、ミネルヴァ書房.

宮本常一、『忘れられた日本人』、1960年、→1984年、岩波書房.

柳田國男、『婚姻の話』、1947年、→『柳田國男全集 12』、1990年、筑摩書房.

(愛知教育大学教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2005年3月25日受理、2005年7月15日審査終了)

Two Narratives from Fieldwork

NAKASUJI Yukiko

This paper examines the structure and transformation of “narratives” encountered by the author while undertaking research involving fieldwork. It does so through a study of “narratives” belonging to two different spaces that arose in the course of conducting interviews on ancestor worship. The issue is whether the differences in these two narratives encountered by the author arising from the same topic of a family’s ancestor worship cast them as part of shared memory among a village or make them personal and private matters.

When considering research methods that would take account of these differences in the style of narrative the author noted the studies of rural villages undertaken by Tadashi Fukutake. That is, Fukutake allowed for the co-existence of two different styles of narratives within the same village by combining the two methods of conducting interviews on village structure and surveying respondent’s attitudes using a standardized sheet of questions. Another example of research with this kind of multi-layering of narratives is to be found in Tsuneichi Miyamoto’s “The Forgotten Japanese.” In this work, Miyamoto views the gathering together of people to discuss issues as the oldest narratives of a community, from which the narratives gradually become alienated and take on a personal flavor. In this paper, the author takes another look at this change using two criteria. These criteria are the survival of two restrictions that do not allow for separating out narratives by individuals from the personal interests or opinions of the individuals themselves. One restriction is based on a shared past, while the other is a restriction caused by horizontal ties, such as those experienced in *wakamono-gumi*, or young men’s groups. This first restriction is examined using the concept of “indebtedness to the past” from Ruth Benedict’s “Chrysanthemum and the Sword.” The concept of “group consensus” in Kunio Yanagita’s “Stories on Marriage” is used for considering the second restriction.

In fieldwork there is a mixture of narratives that can be located variously using these two criteria. Consequently, care is required concerning the topology of these narratives so that it is independent of differences in the values and conventions contained in these narratives that make them shared or personal.
